

和本
大好き!



編集 ○ 日本近世文学会

2017.7.15

和本 実践記録

目次

▼和本リテラシーニュースとは…02

実践記録①中学生対象 平野多恵（成蹊大学）
中学三年生の和本体験

成蹊オープン・セミナー「和本の世界」…03

実践記録②中学生対象 加藤弓枝（豊田高専）
くずし字を用いた古典教育の試行
古典への興味・関心を喚起し、必要性を感じさせる
教育を目指して…06

実践記録③大学生（短大生）対象

二本松泰子（長野県短理科大学）

短大生による和本リテラシーと地域貢献
…08

実践記録④社会人対象 近藤典子（駒澤大学）
和本を読む楽しみ

PTAサークルでの実践…11

実践記録⑤外国人対象 恋田知子（国文学研究資料館）
世界に広げる「日本古典籍講習会」

ホテルとパークレーを例に…14

▼出前授業のあゆみ（二〇一六年度実施分）…16

▼出前授業の実施について…16

▼編集後記…16

あらゆる領域のヒントが詰まっている

古典籍（和本）をどう読み、理解し、活用するか。

和本教育の実践記録を伝える冊子、第三号！

ご自由にお持ちください

和本リテラシー ニューズとは

ここでいう「和本リテラシー」とは、広い意味では、江戸時代末までに書写もしくは刊行された古典籍（和本）をどう読み、理解し、そして活用していくかといった、日本古典籍に関わる総合的な能力を指すものです。と同時に、狭い意味では、いわゆる「くずし字」（変体仮名）の読解能力を指します。

昨今、この種の能力はいつそう衰退の一途を辿っていますが、二十一世紀を迎えて、日本の現状が混迷を深めれば深めるほど、〈古典〉の重要性は増しているの見るべきでありましょう。〈古典〉は文学だけではなくあらゆる領域に存在します。さまざまなヒントが詰め込まれている〈古典〉を存分に理解し吸収するために、今こそ「和本リテラシーの充実を」と願わずにはいられません。

このリーフレットは、「和本リテラシー」の実践記録を集積し発信することで、古典もしくは古典籍を学ぶ方はもちろんのこと、教える立場にある方々にも一つの指針（モデルケース）としていただけるように願って発刊されます。

どうか、小さな動きがやがて日本各地で大きなうねりに発展し、老若男女がみな自力で、〈古典〉の豊かさを存分に享受できる日が来ますように。

二〇一五年七月

日本近世文学会 広報企画委員会

*第1号「刊行にあたって」を転載

実践記録

1

中学生対象

中学三年生の和主体験

成蹊オープン・ゼミ「和本の世界」

平野多恵（成蹊大学） HIRANO Tae

勤務校の成蹊学園は小学校・中学校・高校・大学が吉祥寺の同じキャンパス内にある。そのワンキャンパスの環境を生かして、成蹊大学の講師陣による成蹊中学三年生向けのゼミ体験「成蹊オープン・ゼミ」が二〇一五年の秋に始動した。中学生のうちから大学の学びを体験することで、じぶんの将来や進路を考え、日々の学習をさらに深いものにしてほしいという願いに基づき企画である。

この「成蹊オープン・ゼミ」の第一弾として「和本の世界」というゼミを開講する機会を得た。明治時代以前につくられた和本について体験的に学ぶことで、その和本を手にしてきたむかしの人々と現代の自分がかたじかにつながっていることを実感し、日本の古典文化への興味・関心を高めてもらうことを意図したものである。以下、このゼミの概要を紹介したい。

ゼミの概要

成蹊オープン・ゼミは、一〇月～一月の期間内に全三回（各回八〇～九〇分）、あるいは全四回（各回六〇分）を目安に行われた。本ゼミの場合、和本づくりの体験も含むため、九〇分×三回に設定し、参加者は成蹊中学三年生三名（いずれも女子）であった。ゼミに参加するのは希望者のみで、中学校の授業後に自主的に参加するプログラムということもあり、古典文学や古い本、くずし字に関心のある生徒が集まったようである。第一回目におこなったアンケートで参加理由をたずねたところ、和本を実際につくるのがおもしろそう、古典の授業が好き、書道習っているのにくずし字を学んでみたかった、むかしから人々の身近にあった本に興味があったなどの回答があった。

各回は、第一回はじめての和本（二〇一五年一〇月二六日）、第二回和本をつくる（同年十一月二日）、第三回くずし字を読む（同年十一月九日）というテーマでおこなった。以下、各回の内容について具体的に紹介する。

第一回 はじめての和本

はじめて和本に触れる生徒のために、和本とは何か、その種類と変遷、綴じ方、大きさなどについて、実物を手に取ってもらいながら解説していった。はじめに写本と版本を見せ、もととは手で書き写されていた本が、江戸時代に出版技術が確立すると版本が多く作られるようになったことを確認した。さらに、卷子本・粘葉装・列帖装・折本・袋綴の和本を見せて、各特徴を簡単に説明した後、その装訂の成立順を考えた。その際、各装訂の名前を一つずつカードに記し、それをゲーム感覚で並べてもらった。自分の頭で装訂の違いに向き合ってみることで、教員の解説がしぶんごになってくる。その後、生徒の考えを聞きながら、各装訂のつくりかたと変遷について解説し、本の装訂は糊を使ったものと糸を使ったものに二大別されることも確認した。現代の本と同じく、和本にも美濃判や半紙本など、さまざまな大きさの本がある。最後に、大きさの異なる和本を見せ、本のサイズによってジャンルも異なる傾向があることを述べて終わりとした。

第二回 和本をつくらう

和本づくりの実習をおこなった。糊を使った粘葉装と糸を使った袋綴の和本を一冊ずつ手づくりした。つくりながら装訂の違いを実感してほしいと考えて、二種類の装訂に挑戦してもらったが、二冊を完成させるには少し時間が足りなかった。粘

葉装は時間内にできあがったが、袋綴は最後まで仕上がらなかったため、作り方を説明したうえで次週の第三回目までにつくってきてもらうことにした。

第三回 くずし字を書こう

変体仮名(くずし字)の初歩を学び、それをふまえて和本の一部を読み、最後に自分の名前を変体仮名で書いて全三回の締めくくりとした。

まず導入として、現代の日常生活の中にも変体仮名が生きていることを実感するため、割り箸の外袋「おてもと」や吉祥寺の和菓子店の包装紙、街中の蕎麦屋などの看板に書かれた変体仮名を取り上げた。ワークシート形式にしてプリントを配布し、考えて記入してもらった後で、変体仮名一覧を配布し、仮名の母体が「字母」と呼ばれる漢字であることを説明した。

次に、第一回目で見せた和本から一冊を選び、その解説に挑戦した。選んだのは江戸時代の版本『清明歌占』(成蹊大学蔵)である。平安時代の陰陽師安倍晴明がつくったとされる和歌



生徒たちのつくった和本



自分の名前を変体仮名で書く

占いの本であることを述べて、その占い方を説明してから、最初の一首を翻字した。和歌は短く、しかも意味が完結しているので、変体仮名の導入に適している。変体仮名一覧にとらめっこしながら一文字ずつ読み解いていくのは、暗号を読み解くような感覚で楽しいものだったようだ。そばで見ても集中しているのが伝わってきたし、筋がいいのか、とてもよく読めていて感心した。

さらに、自分の名前を変体仮名で書く練習をおこない、第二回目ですくった和本に記した。せっかくの機会なので昔の人にならって筆に墨で書くことにした。仮名書道の指導については、

成蹊大学の社会人大学院生で、書家でもある牛田衣さん（牛田 衣さん）のご助力を得た。

自分の名前を平仮名で書き、その仮名と同じ音の変体仮名の候補を選び出す。その候補の中から続けて書いたときにバランスのよい組み合わせを決めた。

最後に手づくりの和本二冊に自分の名前を記して、自分だけの和本ノ

トが完成した。この二冊は、このゼミが終わった後も生徒の手元に残る。それを見るたびに、このゼミを思い出し、欲をいえば古典の世界を自分につながるものとして感じてもらえたらうれしい。

私たち研究者も、和本を実際に手に取ることで、読んだり、書いたり、売り買ったり、さまざまな形でその本に関わった人々の営みを感じとる。本そのものの存在感が想像力をかき立てるのである。だからこそ、できるだけ多くの人たちに、とくにこれからを担う若い人たちに、和本の「物」としての存在感に触れてもらいたい。そして、その手触りに当時の人々の息づかいを感じ、むかしと今がつながっていることを発見してもらえたら幸いである。

「付記」本ゼミの内容は前任校の十文字学園女子大学短期大学部における授業をふまえたものである。この授業では、和本づくりや変体仮名の読み書きのほか、墨流しなどの装飾料紙づくり、書誌調査入門などもおこなった。詳しくは拙稿「書物の文化―古典文化の体験型授業2」（『十文字国文』第一五号、二〇〇九・三）をご参照いただきたい。



くずし字を用いた古典教育の試行

—— 古典への興味・関心を喚起し、必要性を感じさせる教育を目指して

加藤弓枝（豊田高専） KATO Yumie

1 今後の古典教育に求められること

今春、中学校の新学習指導要領が公示された。現行の学習指導要領で充実した、古典を含む伝統的な言語文化に関する指導が、引き続き重視された内容である。また、高等学校では、古典に対する学習意欲の低さが課題となっており、次期学習指導要領には、古典に親しみやすい新たな必修科目を設ける案も出されている。その科目では文法中心の学習ではなく、古典や関連する近現代の文章を読むことを通して、社会や自分との関わりの中で古典を生かす学習を重視するという。つまり、生徒の興味・関心を喚起し、必要性を感じさせる古典教育を探ることが、今後ますます求められているといえよう。

このたび、名古屋大学教育学部附属中・高等学校の加藤直志氏、愛知県立大学の三宅宏幸氏ならびに筆者は、中学生を対象

に、くずし字で書かれた江戸時代の桃太郎や猿蟹合戦を読むという二種類の特別授業を協力して構築し、二年間に計四クラスで実施した。その結果、適切な教材を用意することができれば、生徒たちの古典への関心や意欲を深めるために、「和本リテラシー」が有効な教育方法になり得ることがわかった。ここでは、その実践を通して見えてきた効果や課題について記したい。

2 くずし字を用いた出前授業を通して見えてきたもの

出前授業は、いずれも各年度末に中学一年生に対して行った。生徒たちは現行の学習指導要領に則り、小・中学校で音読や朗読などを通して古典に親しむ教育を受けている。よって、生徒ごとに古典に対する印象が形成されつつあり、なかには古典嫌いの者や、学習の必要性に懐疑的な者も含まれていることが予想された。それゆえ、生徒の学習意欲に直結する教材選びは、とりわけ重要な作業であると考えられた。幸い、我々の出前授業では、江戸期に刊行された草双紙から、有名な話で、かつ面白い表現が含まれ、さらにくずし字読解を通して新たな知見を得ることができると作品を、三宅宏幸氏が適切に選出してくれた。

授業では、くずし字とは何かを解説した後、グループを作らせ、クイズ感覚でくずし字の解読に挑ませたが、身近な昔話の意外な展開に、授業は大いに盛り上がった。また、楽しいだけで終わらせないため、くずし字を学ぶ意義や古典を学ぶ意義などについても、考えて発表してもらった。生徒たちは積極的



生徒は机を向かい合わせにして4人グループに

に授業に取り組んでおり、感想も好意的な内容が多数を占めた。よって、くずし字の読解を通して古典に親しませることで、興味や関心を喚起するような教育の在り方を探るといって、実践の狙いはある程度達成できたといえる。しかし、古典入門期の学習意欲をその後も持続させることは容易ではない。

3 古典への学習意欲を持続させるために

今後は、様々な学年や多くの学校で実施できるように、くずし字読解を始めとする和本を用いた古典教育の構築や、教員が利用しやすい教材開発を推進したい。くずし字や和本は確かに

専門性が高い側面はあるが、適切な教材を使用することができれば、古典への関心を高める効果的な教育手法となる。前回の出前授業の際には、関西の学校から逢々見学にお越したださった方もあった。また、加藤直志氏は、今年度のフルフライト・ジャパン主催の日米教員交流プログラムにて、本実践の一部を米国で紹介された。このように、和本リテラシーの輪は、教育現場へも広がりにつつある。この気運が高まることで、志を同じくする方が一人でも多く現れてくださることを願っている。



くずし字教材は取り組みやすい穴埋め問題に

「付記」授業の詳細は「くずし字による古典教育の試み―日本近世文学会による出前授業―」（『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』第六一集、二〇一六年二月）を参照されたい。なお、本報告書は名古屋大学学術機関リポジトリに登録され、WEB公開されている（二〇一七年七月現在）。



短大生による和本リテラシーと地域貢献

二本松泰子（長野県短期大学） Nihonmatsu Yasuko

私が現在、勤務している長野県短期大学では、多文化コミュニケーション学学科日本語日本文化専攻に在籍している学生たちと和本リテラシー教育を実践している。以下に、その概要を報告する。

1 短大の授業におけるくずし字学習の取り組み（一年生）

本学は、現存する公立短大の中で日本最古（昭和二五年（一九五〇）開学）の歴史を持つ。その前身はさらに古く、昭和四年（一九二九）創立の長野県女子専門学校にまで遡る。いわゆる女専として本学が開学したとき、最初に設置された学科が国語科であった。現在の日本語日本文化専攻がその後身に当たる。そのため、本専攻では開学以来の伝統を踏まえて、日本文学を学ぶための専門科目が短大にしては比較的多い。一年次

に開講される専門教育科目の「日本古典文化論基礎演習」(半期・必修) という古典文学の演習を行う授業もそのうちのひとつである。この授業において、本専攻の一年生たちには毎年、くずし字を学んでもらっている。その勉強法はオーディオックスで、近世版本の影印本をテキストにして、範囲を決めてグループごとにその本文を翻刻・発表するというものである。また、発表と並行して、適宜、くずし字の小テストも実施している。毎週のように発表と小テストがあるので、短大生にとっては、負荷のかかる学習内容ではあるが、日本文学系の科目を重視する本学伝統の学風もあり、みな意欲的に取り組んでくれている。このような授業を通して、本専攻の一年生は、二年生になるまでに、版本に見えるくずし字のひらがな部分については、ほぼ解読できるようになる。

2 短大の授業におけるくずし字学習の取り組み（二年生）

本専攻では、二年次になると必修科目として「卒業研究」の科目が開講され、全員二万字以上の卒業論文の執筆が義務付けられている。毎年四四人前後が在籍している本専攻の学生のう

ち、約一割から二割が「くずし字を読解して卒論を書きたい」という目的で日本古典文学・文化ゼミ（古典ゼミ）を希望している。そのような学生たちの多くが卒論のテーマとして選ぶのは、本学付属図書館に所蔵されている和本である。先述のように、本学の前身である長野県女子専門学校は国語科から始まったため、開学当時にまとまった数の和本が付属図書館に寄贈された。それを受け継いで、現在も本学の付属図書館には八〇〇冊程度の和本が所蔵されている。人文学系の学部を持っている四年制大学の図書館に比較すると微々たる量ではあるが、それでも中には、未だ翻刻が公刊されていない近世の版本や底本^{ていほん}不明の写本^{しよほん}など、従来あまり知られてこなかったテキストも含まれている。古典ゼミの学生が卒論の対象として選ぶのはこういった無名のテキスト類で、学生たちはそれをスマートフォンなどで各自撮影し、全文の翻刻作業を行うことから卒論研究を始めている。テキストの中には、^{しよがき}朱書・^{すまがき}墨書での書き入れが見えるものもあり、それらは学生たちにとって「母校にしかないマイテキスト」という愛着を感じさせるものらしい。学生たちは、このような愛着を原動力にして翻刻に励んでいる他、ゼミのメンバー同士で読めない字を教え合ったりしてくずし字読解能力を高めている。このように、和本の「現物」をいつでも気軽に手に取って見ることができるといふ本学の環境は、学生たちが和本に親しみ、くずし字を読む力を深化させるために適切な教育現場を提供してくれている。

3 和本の展示と地域貢献

ところで、長野県短期大学は二〇一八年度末に閉学し（一部の学科は二〇一九年度末）、その長い歴史に終止符を打つ。その後、四年制の長野県立大学が開学するのであるが、当該の大学には文系の学科専攻がない。そこで、県短に古典ゼミが存在しているうちに母校の付属図書館の和本の存在をできるだけ広く知ってもらいたいとの思いから、二〇一三年度の古典ゼミ生たちが「長野県短＊古典ゼミ翻刻HP」(<http://nagakem2013koten.seesaa.net/>)というサイトをネット上に立ち上げた。同サイトでは、代々の古典ゼミ生たちが卒論で取り上げた付属図書館所蔵の和本の翻刻文を掲出している。さらに

は、本学は県立の短大であることから、自分たちの勉強の成果を少しでも地域に還元してゆきたいという機運が高まり、二〇一四年度の六鈴祭^{ろくすずまつり}（学園祭）から、



和書展示の準備をする学生





学生たちによる手作りの展示机

古典ゼミでは付属図書館の和本のやさやかな展示会を行うようになった。この展示会は、地域の人たちに本学の和本を身近に感じる機会を提供することを主な目的として、卒論で和本を扱う学生たちが企画・運営しているものである。まず、付属図書館の和本から、自分たちが卒論で取り組んでいる作品や長野県ゆかりの作品（『おらが春』など）を選び、お手製の装飾を施した展示机に設置する。また、作品解説やくずし字の解説などを記載したボードも自分たちで手作りし、和本と併せて展示する。当日は、見学者たちの質問に答えることが出来るよう下準備をした学生が展示机に交代で張り付き、ときには、見学者の

リクエストに応じて「くずし字クイズ」を実施する。このクイズは、くずし字をいくつか記載したポスターを作り、会場の壁に貼って何の文字かを当てるものである。なお、展示機の横には喫茶部として、見学に来た人たちが寛げるよう、茶菓をふるまうお店のスペースを設けている。

このような和本の展示と喫茶店が一体化した「和書喫茶」は、すべてが学生たちの手作りによるやさやかな展示会ではあるが、地元のマスコミには相応に注目され、毎年さまざまな新聞社やケーブルテレビ・ラジオなどから取材されている。このようなマスコミの効果もあり、遠方からも和書喫茶に訪れる人がたくさんいて、中には、自宅の蔵にあった巻物を持参してそれに書いてあるくずし字を学生に読んでもらう人もいた。そのような地域の人たちとの温かい交流は、学生たちにとって良い思い出となっている。ちなみに、マスコミの取材に対応するのは、学生たち自身である。本学には素朴な気質の学生が多いことから、マイクを向けられると恥ずかしがるゼミ生もいるが、もうすぐ閉学する母校に埋もれている和本を、地域の皆さんにできるだけたくさん触れてもらいたいという思いに支えられて、みな熱心にインタビュアーに答えている。このような経験を通して、学生たちには、地域とのつながりにおいてくずし字を学ぶ意義を実感してもらっている。

以上のような、くずし字読解能力を身に付けた短大生による地域貢献の実践例を踏まえると、和本について学ぶことの重要性が改めて認識できる。和本リテラシーは、机上の学問に留まるものではなく、広く社会に還元してゆくことができる豊かな教養そのものであると確信する次第である。

実践記録

4

社会人対象

和本を読む楽しみ

PTAサークルでの実践

近衛典子（駒澤大学）

KONOE Noriko

1 PTAサークル発足

月に一度ほど、都立の中高一貫校である桜修館中等教育学校のPTAサークル「江戸文化を楽しむ会」で江戸の版本ほんぽんを読んでいる。この学校は旧制府立高校、都立大学附属高校の流れを汲むが、二〇〇六年に新たに中等教育学校として生まれ変わったばかりのまだ若い学校である。そのため、当初はPTA活動も手探り状態であったが、有志が合唱サークル開設を実現したのを皮切りに、フォトサークルも誕生、密かに囲碁部もあるらしく、子供だけでなく保護者も楽しむという雰囲気があふれていた。そんな中、ある縁で和本わほん輪読の新規サークルを立ち上げることとなったのである。「読めるならくずし字を読んでみたい」と言う保護者の言葉に力を得て、恐る恐る副校長先生にご相談したところ、ぜひ実現して下さいと背中を押して下

さった。また当時のPTA会長も、どうせなら読書だけでなく文学散歩や浮世絵鑑賞など、くずし字の周辺を含めた「江戸文化を楽しむ」会にしたら、とアドバイス下さった。そこで、早速保護者の方々に声を掛け、二〇一五年に発足した。

最初のテキストに選んだのは梅暮里谷峨うめぼりたにがの読本『斯波遠説七長臣』しほえんである。有名な作品ではないが、未だ活字化されていないことに加え、溪斎英泉せいやいゑいせんの描く蛙や妖怪の挿絵のユニークさに興味を覚え、数年前に勤務先の大学三年生対象の演習で取り上げたものである。版本に不慣れな学生が、この作品のテンポが速く奇想天外なストーリー展開にすっかり魅了され、授業だけでは飽き足らず全編を自力で読もうと意欲を示すまでになった。この経験を踏まえ、読みやすく面白い作品ということを選んだ。そもそもサークル結成の第一の目的が親睦であり、勉強会というよりは「くずし字」という一般には馴染みのない新しいものを知り、ついでに保護者同士で楽しくコミュニケーションを図りたい、というものであったから、何よりも会員が興味を持って読み進められる作品である必要があったのである。大学教育と社会の関心を「つなぐ」、そんな役割が果たせ





2016年 文化祭でのサークル紹介文

たらしいな、という気持ちもあった。

2 定例読書会

会場は、学校の授業日で、かつ授業等に差支えない時間帯に一教室を拝借できることになった。当面は月に一回程度、時間は土曜の午後二〜三時間とし、第一回目の読書会を二〇一五年一〇月三日の二時より行った。集まったメンバーは筆者を含めて五人。架蔵の版本の第一巻のコピーと手持ちのくずし字字典を人数分用意して配付し、まずは自己紹介をした。筆者以外はくずし字にほとんど触れたことがなく、大学で江戸文字を専攻した方もいらっしやらない。そこで、まずは持参し

た和本の実物に触れてもらい、作品冒頭の口絵や挿絵を見ながら、これからのような物語が始まるのか、大つかみに説明した。口絵の美しさに「これが版画？」というため息が漏れた。ついで本文読解である。一行目に出て来る仮名一つ一つについて、くずし字字典を片手に、字母とくずし方を黒板で説明しながら読んでいく。同じ字が何度も登場するので、数行進んだ辺りから、時折メンバーを指名して読んでもらうことにした。小さな悲鳴が上がるが、字典をひっくり返し、前の行を必死に目で追って、正解に辿り着く。こうやって徐々にくずし字に慣れてもらい、また読本というジャンルや作品読解に必要な時代背景についても説明を加えて、第一回は無事に終了した。字典については購入を勧めたわけではないが、やはり持っていた方がよいという声が多かったため、安価なものをこちらで用意し、実費で頒布することにした。

以後、慣れるに従って一人が担当する分量を増やし、数行から半丁分ずつ声に出して輪読し、話の切りのよいところで筆者が内容について説明を加える、という形式で進めている。会員の上達は目覚ましく、途中入会の方も数回の出席でスラスラ読めるようになっており、詰まると他の会員から助け船が出される。忠孝の精神や親子の情愛、恋愛の機微などに通じているのはさすが年の功、イマドキの学生とは理解力が桁違いである。また、欠席者が話が分からなくならないよう、会長さんが毎回、読書会後に話の展開をメールして下さり、その手際の良い纏め

方に感心させられる。筆者はくずし字の知識に一日の長があるので解説に回るが、あくまでも「先生」と「生徒」の関係ではなく、共に和本を読み楽しむ仲間という対等のスタンスを保っている。

3 江戸文化を楽しむ

最初の年の年度末。二月、三月は学校と会員の都合がなかなか合わない上に、受験生の親もいて気もそぞろ。苦肉の策で、思い切って読書会は休会とし、春の一日、太田記念美術館で開催中の「勝川春章展」を鑑賞することにした。これが思いのほか良かった。予定が立たなかった会員が当日に急遽参加することも、その逆も可能である。浮世絵は肩が凝らず、美しい色彩が楽しめるだけでなく、画の中に書いてある文字が読めるようになっていた、という嬉しい実力確認もできる。また、今読み進めている読本というジャンルと浮世絵との密接な関係も、この展示でよく理解された。浮世絵鑑賞は初めて、という会員がほとんどだったが、皆さん関心を持ってくれて、最初の年度のよい締め括りとなった。

二〇一六年秋には、生徒会が決めた文化祭の統一テーマが「江戸」である由で、PTAが出店するカフェの装飾に協力することになった。町中で見掛けるくずし字でクイズを作ることにしたのだが、探せば身近に結構あるのに驚いたという声が多かった。夏休みの一日を使い、和紙で江戸風の切り絵細工にも挑戦、



ある日の読書会。メンバーは現在、12名。

書道の心得のある会員がくずし字風に書いてくれたカフェの看板を飾り付けたりと、童心に帰って大いに盛り上がった。このように、様々なバックグラウンドを持った保護者たちが和本で繋がり、江戸の世界へ親近しつつ、OBも含めて互いの親睦も深めている。私たちの活動に最大限の理解を示して下さいる学校に心から感謝し、今後も気長に楽しく続けていければと念じている。

世界に広げる「日本古典籍講習会」

ホノルルとバークレーを例に

恋田知子（国文学研究資料館） KOIDA Tomoko

国文学研究資料館では年に一度、古典籍こてんせきを所蔵する機関の職員を対象に、「日本古典籍講習会」をおこなっている。古典籍が広く活用されるよう、書誌学の知識や整理方法の技術を修得するための研修会で、十数年にわたる蓄積がある。毎年、各地から多数の応募がある人気の講習会なのだが、最近では海外からの参加者もいる。資料の管理・保存やデジタル化など、古典籍をめぐる状況は著しく変化し、国内外を問わず、効果的な活用や環境整備への要求は高まる一方である。

そこで今西祐一郎館長いまいしゆういちろう（当時）の発案により、講習会を海外で試みることとなった。二〇一七年春にホノルルとバークレーで開催された「日本古典籍ワークショップ（WS）」である。カリフォルニア大学バークレー校（UCB）では前年に試験的におこなってみたのだが、今回は先方のニーズに答え、講

習会の継続的な実現を見据えて事前に入念な打ち合わせを重ねた。いずれも現地の古典籍を用い、可能な限り英語を併記したパワーポイントを準備して臨んだ。

1 ホノルルでの日本古典籍WS

二月一七日、ホノルル美術館で開催されたWS（ハワイ大学マノア校・ホノルル美術館・国文研共催）は、ハワイ大学の院生に向けて、美術館蔵「リチャード・レイン」コレクションを用いておこなわれた。バゼル山本登記司書やまもととせしのイントロダクションに続き、「基礎編」と「実践編」からなる講習会を試みた。「基礎編」では、恋田が同館蔵『富士の人穴草子』を例にくずし字を概説し、神作研一氏かみやくけんいちが書誌の著録法を説明した。古典籍を「比べて考える」重要性を説き、本WSのテーマが明示された。「実践編」では、寺島恒世氏てらじまつねよ「百人一首と歌仙絵」、齋藤真麻理氏まおり「奈良絵本」、小林健二氏こばやしけんじ「鉢かづき」、入口敦志氏いりぐちあつし「大坂物語」の解説が続く。各講師の専門に基づいた研究手法や同館蔵本の特徴が示された。たとえば入口氏は、『大坂物語』を例に、匡郭きやうかく（版本の本文の外枠線）や版心はんしん（各丁の折り目の

部分) など外見的な特徴のみから伝本の分類や比較が可能なることを示し、同一作品の版本を多数所蔵するレインコレクションの特色を活かした研究手法を解説した。

豊富な和本前に説明したことで、熱心な質疑応答が繰り返された。美術館の制約から院生が手に取ることは叶わなかったものの、南清恵氏らアシスタントの方々のご尽力により、貴重な古典籍を十分に「比べて考える」場となった。



20点の『大坂物語』を前に解説する入口氏

2 バークレーでの日本古典籍WS

続いて三月三日、UCBのC. V. スター東アジア図書館で、同大学の教員や院生を対象にWSが開催された(同図書館・同日本学研究所・国文研共催)。マルラ俊江司書によるイントロダクションの後、神作氏「はじめての古典籍」、落合博志氏「写本の装訂」の【基礎編】を経て、【実践編】の講習をおこなった。同館「三井文庫」蔵の古典籍を材に、恋田「奈良絵本『文正草子』」、柳瀬千穂氏「版本『誦本』三点」、入口氏「版本の諸問題―医学書を例に」、小山順子氏「稲葉黙斎自筆『孤松全稿』」の解説があり、モノに即した研究方法を提示した。た

とえばUCB本『文正草子』には針目安(書写の校正のため料紙の各行の首尾に針で開けた穴)や挿絵の裏書きがあり、奈良絵本作の年代や過程がわかることを説明した。

二つのWSを通して、多種多彩な古典籍をいかに整理・分類し、研究対象として活用するか、その具体的な方法が切実に求められていることを実感した。今回私たちが意識したのは、海外と同環境に身を置いたと仮定することで、未知の作品や伝本について図書館の辞典や参考書、データベースでどこまで明らかにできるか、いわば研究者の手の内を明かすよう努めた。改善点も多々あるが、古典籍を用いた研究の国際化への大きな一歩となったはずである。いずれもWSに向けた事前準備が肝要で、改めて関係各位に感謝するとともに、今後も互いに議論を重ねながらより良いものを作り上げたい。

「付記」両WSの概要は『国文研ニュース』四七号(二〇一七年五月)掲載の神作氏による報告を参照されたい。また、当日の報告資料は各図書館のウェブサイトにて公開中。



奈良絵本『文正草子』の針目安を確認する様子



▼出前授業のあゆみ（二〇一六年度実施分）

◆和洋九段女子高校（高三）

二〇一六年一月一七日（木）

神作研一「江戸の本いろいろ―見て、さわって、読んでみよう―」

◆桐蔭学園中学校男子部・同女子部・中等教育学校（中三）

「昔の文字を読んでみよう」

①二〇一七年二月一五日（水）

井上泰至・神林尚子・土屋順子・宮本祐規子

②二〇一七年二月一六日（木）

勝又基・紅林健志・佐藤温・藤井史果・二又淳・牧野悟
資・真島望

◆日本女子大学附属高等学校（高一〜三）

二〇一七年二月二七日（月）

宮本祐規子「江戸の絵本を読んでみよう」

◆名古屋大学教育学部附属中学校（中一）

二〇一七年三月一四日（火）

加藤弓枝・三宅宏幸「くずし字をよんでみよう」

▼出前授業の実施について

日本近世文学会では、くずし字の読み方や和本を知っていただ
く一助として、学会員を講師とした出前授業を実施しています。
主たる対象は小学校・中学校・高校。期日・時間等をご相談下
さい。講師派遣の諸費用は、原則として学会が負担します。左
記アドレスまで、どうぞお気軽にお問い合わせ下さい。

広報企画委員会【E-mail:koho@kinseibungakukai.com】

編集後記

▽「出前授業」は中学校、高校の現場から幸い好評
で、前年度実施の学校からは再度のご依頼があった。
また新規に受け入れていただいた学校もあり、多数
の学会員のご協力を得て、上記のように実施するこ
とができた。今後も一人でも多くの生徒、児童に、
和本という未知なる世界を体験してもらいたいと願
う。▽本号には五名の方々に寄稿していただいた。
平野稿は中学生向け和本レクチャーの実践報告、加
藤稿は名古屋大学附属中における出前授業報告、二
本松稿は短大におけるくずし字教育と地域貢献の報
告、近衛稿はPTAサークルの試み、恋田稿は海外
での日本古典籍講習会の報告である。様々な場に、
くずし字を読み、和本を活かす実践が広がりつつあ
ることを感ずる。▽編集は、広報企画委員会和本リ
テラシー部門の宮本祐規子（日本女子大学（非）/
チーフ）・神作研一（国文学研究資料館）・山田和人
（同志社大学／副委員長）・柳沢昌紀（中京大学／委
員長）が担当した。▽本誌は紙媒体で刊行し、さら
に学会HPでWEB公開もしている。紙媒体は当初
第三号までの予定であったが、第五号までの継続が
決まった。関係各位のさらなるご支援、ご協力をお
願いしたい。（柳沢昌紀）

